

中世の公家と読む。5.

▼流通▲

交流空間としての奈良街道

—信仰・女性・博打の伝承

森栗茂



立君（「七十一番職人歌合」東京国立博物館蔵）

奈良街道と民俗

従来、南山城、木津川右岸の農村地帯には、農村民俗しかないかのように思われてきた。しかし、南都と京を結ぶこの街道には、周辺農村とは異なる、「街道の民俗」が展開している。東大寺二月堂や石清水八幡宮（男山八幡）の信仰、後家や私生児を「軒前」として認める宿場町、博打や市の伝承。どれをとっても、近世農民生活を基本とする常民世界とは異なる非常民の世界が、街道には展開している。

ここで紹介する大和街道は、まぎれもなく近世街道であるが、そこに展開する非常民の民俗文化には、中世の奈良街道を想わせるものが少なくない。実際のフィールドの伝承は近代のものであるが、その奥には、古代の香りや中世の風景、近世の残存を想像せしめるものが残っている。折口信夫は、伝承のなかの基層文化をとらえて「古代」と表現した。ここでは、街道の人びとの博打・商いなど非常民的活動や、女性の自由な活動を、「中世の風景」を想起せしめるものとして、民俗的中世とよんで記述してみたい。

別な言い方をすれば、日本の城下町と農村の都鄙連続文化は、近郊農村との野菜・薪炭・商品作物と、近世都市の商品・下肥との相互関係に深く起因している。農村・農民を基盤とした近世都市の文化である。これに対して、線としての境界空間の街道に展開する文化は、農村とは異なるマチ（計画された都市ではなく自然発生的な交流空間）の発芽ともいえ、都市民俗学による歴史分析の視点にたてば、「中世世界を想像させるような民俗」の濃厚な場と考えることができる（森栗茂一、一九九三年）。

近畿歴史街道キャンペーンにおいても、伊勢参宮街道が古代の道、この奈良街道が中世の道、京坂の淀川交通が近世の道、阪神が近代の道とされた。地域特色を、時代相でみる名言である。奈良街道は日本を代表する中世の風景であった。本論では中世の奈良街道をしのばす大和街道の民俗に、中世のマチをみることを目的としたい。

奈良街道とは、京都から六地藏（京都市伏見区）・宇治・久世鷺坂（城陽市）・奈良（城陽市）・多賀（井手町）・上狛・木津を通過して奈良に至る古代からの山沿いの踏みわけ道である。『大乗院寺社雑事記』文明十七年（一四八五）十月十九日条の地図に「高、一六宮、菜島、北菜島、丈六、新野池、夜叉ツカ、

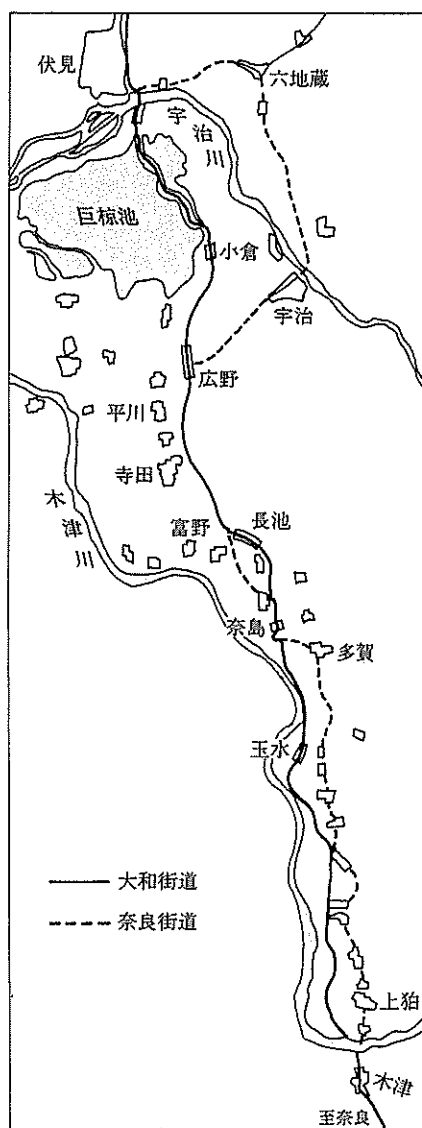


図1 大和街道と奈良街道（推定。宮垣克己、一九八五年、一五九頁より）

クセノ宮」とある（宮垣克己、一九八五年、一五九頁）。時代によって、いろいろなルートがあった。ところが、秀吉が巨楨池に太閤堤を築き、堤の上を通り宇治を経由しないで、伏見から直接に大和へ行く道を開発した。これが大和街道である。結果的に、大和街道は次のような特色がある。第一に、宇治經由をしないこと。第二に、伏見を起点とすること。第三に、奈良以南は木津川堤を使って、多賀・織田・上狛などの集落を通らずに木津に向かうことなどである。

ここでは、厳密な意味での中世の奈良街道を描くことを目的とはしない。奈良街道に重ねられた大和街道の宿・茶屋集落の伝承から、街道の人々の有り様、ある意味では、中世の自由な交流空間につながるような境界のマチの民俗を記述する。とくに、中世の奈良街道と近世の大和街道とが重なることが多い、宇治市大久保から城陽市内までを中心に記述する。現今の民俗、近世の街道から、いかほどの「中世」が描けるか心もとない。それでも、街道の伝承は魅力的だ。その魅力に誘われて、奈良街道を記述してみよう。

伏見と六地藏

伏見の町が建設される以前、中世の伏見宮の支配下にあった伏見九郷の津として、宇治川北岸に船津がある。『看聞御記』には、風流を出す村の一つとして記述されている。後の柿木浜である。そこに、船を浮かべて客をひく遊女がいた。

伏見町の再建の過程の寛永三年（一六二六）、このような川沿いの遊女を河原のなかにつくった人工

島・葭島の柳町に移し、中書島遊廓をつくった。かくて、柿木浜は伏見南端の市街地に入った。近世の中書島一帯は、遊廓と交通結節点として繁栄した。また、大坂からの淀川水運と、京都への高瀬川水運のターミナルとして、南浜・北浜・西浜などが繁栄した（森栗茂一、一九九〇年、二〇五～二〇六頁）。さらに、近代まで肥船問屋があったり、船頭相手の茶屋が堤防上にあって、南山城から京都に向かった肥船や果物船は、浜に船を係留して休憩した。

伏見の東隣の六地藏は、中世の奈良街道と近江・北陸方面との分岐点である。近世でも、大坂から京都への荷は伏見の南浜などで積み替えるが、近江・北陸からの荷は六地藏に上げて、陸路で運送した。

大亀茶屋

宇治からの奈良街道と、伏見から一直線に南下する近世の大和街道の合流点、中世と近世の交差点は「宇治屋の辻」とよばれ、近世の早い時期には町場化していた。近世、大久保村（宇治市）が百余戸のと き、この街道の街、大久保村の枝村の広野新田村（宇治市）は二百数十戸を数えていた。行商人宿・木賃宿・肥料屋・饅頭屋・水茶屋などが並んでいた（林屋・藤岡、一九八一年、七〇六頁）。新田というよりは、当初からのマチであった。現在も、JR奈良線が奈良街道に沿って宇治を経由するのに、近鉄京都線は伏見から真っ直ぐに南下しており大和街道に沿っている。したがって、JR新田駅と近鉄大久保駅が近接する広野新田は、乗換通勤客で賑わっている。

大亀茶屋の草分けである太田茶屋は、火縄銃と焼印を持って、継馬の許可を出して藩の仕事をしていたという。太田は広野新田にあった淀藩の煙硝蔵の管理をしていたから、そうした所から出た伝承であろう。太田は近隣の集落からのインキヨ（分家）に対して身元引受をし、土地を配分してやり、皆が住むようになったといわれる。そうして住んだ人々には、「塗師屋」「汲屋」（実際は八百屋）などの屋号を持つ家や、髪結いと硫黄屋の夫婦・石屋・木挽屋・建具屋・畳屋・植木屋・運送業などがいた。近代では、鉄道工事に携わって、そのまま鉄道員になった者も多い。また、なぜか女系の傾向があって、養子が多いのが村の特色だという。

江戸初期の『平川村絵図』には、「大かめ茶屋」と街道に記述があり、その東に「久世村三軒」、西に「大窪村六軒」「平河村四軒」とある（大畑忠、一九九二年）。したがって、自治会としては昭和十年に、八幡宮を再建したときに、久世・平川・大久保に所属する人々が「大亀茶屋親善会」を作ったのが最初である。メンバーは久世領が、八幡の筋向かいに茶屋を開いていた太田氏他三名、大久保領が二名、平川領が二名である。それぞれ、出身の村の領内に住んでいるが、太田茶屋を除いて、近世の家がそのまま続いたわけではない。近世の家は多く退居しており、近代に入って、各集落から入ってきたものである。街道の構成員は出入が激しいのである。村の集会場はなく、柴仕事をする入会山も、共同墓地も祭礼も旦那寺も、それぞれの元所属の集落に属していたが、祭礼などの連絡が本集落と充分でなく、大亀茶屋だけで親善会を作った。しかし、婦人会・老人会・子供会は平川集落に所属している。また、八幡を中心とした祭礼もない。

伏拝八幡の記述は古く、『台記別記』の仁平三年（一一五三）十一月二十六日条には、春日参詣の藤原頼長も「八幡伏拝に至り、車を下りて之を礼し、日暮るを恐るるに依り車を馳せ」とある（林屋・藤岡、一九八一年、七〇四〜七二四頁）。伝承に、大亀茶屋の八幡さんに、八幡の八幡さん（石清水八幡宮）から金色の矢が落ちてきて、探してみると金の御幣が椋の木の下にあった。その日が九月十四日なので祭礼とし、村中の者が御神酒をいただいて祭をしていた。また、大亀茶屋の八幡の椋の木の下には狸が住んでいるともいい、八幡を祀っているの、雷が落ちないともいう。



図2 『平川村絵図』部分
（宝鏡寺蔵、城陽市教育委員会提供）

もっとも広野新田が発達したのは近世淀藩の政策によるものであり、中世では、南の大亀茶屋が街道の茶屋であった。大亀茶屋は、「オガミ茶屋」と発音され、宇治市広野と城陽市久世、平川の三集落にまたがっており、大谷川という天井川を街道が上りきった所にある。小高いため、木津川対岸の石清水八幡宮（男山八幡。京都府八幡市）の選擇地となり、

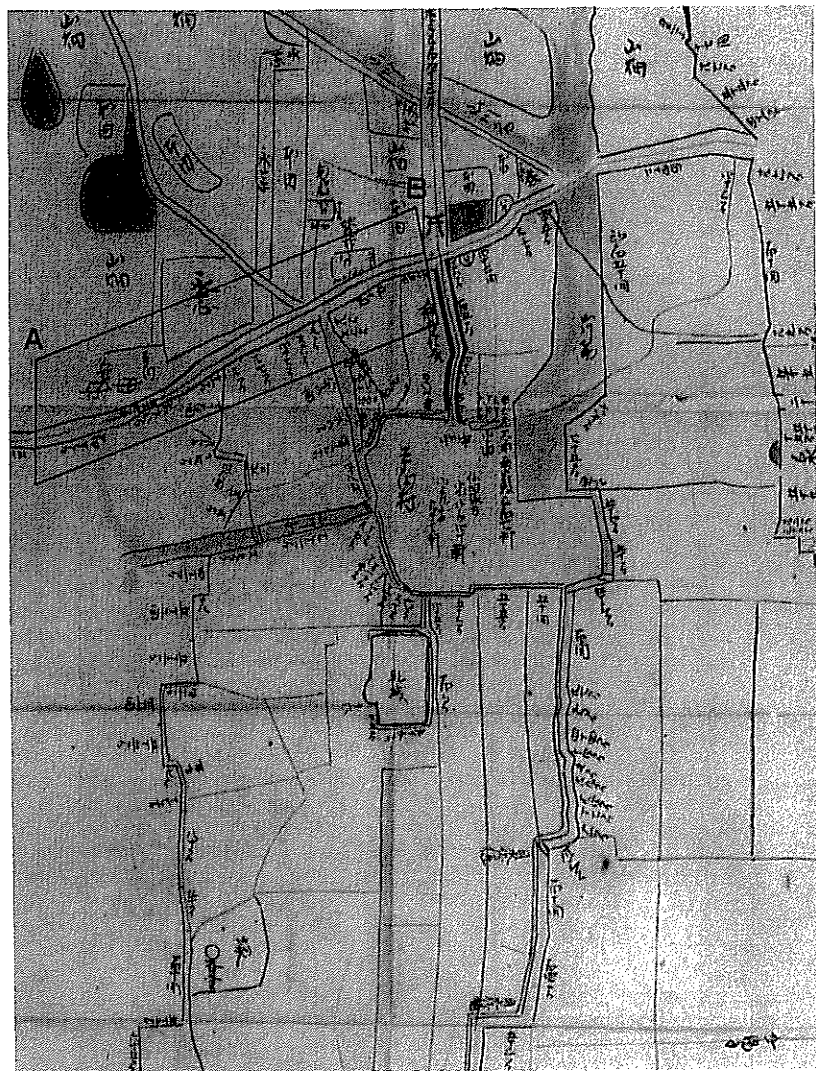


図3 寛文九年『山城国久世郡寺田村領内絵図』部分
(堀淳子氏蔵、城陽市教育委員会提供)

在所(農村)の子供が、街道の村の悪口をいうとき「森の在所(大亀茶屋など)は箸で家たてて、鼻くそで壁塗って、三日天下は乞食在所」と嘲した。農民の街道に対する差別感覚が見事に表現されている。これに対して街道の子は「新田(大亀茶屋及びそれに続く広野新田)白飯、〇〇大根飯(〇〇には相手の村の名前を入れる)」と言いつ返した。街道のマチの自負心が、この言いつ返しをうながした。

久世茶屋と寺田茶屋

城陽市久世東地区は、本村を在所と呼ぶのに対して、茶屋とよびならわされた。久世茶屋の南、街道つづきには、寺田茶屋があった。寺田茶屋は、現在の城陽市寺田北東東地区と中東地区であり、それぞれ茶屋・観音とよばれている。寛文九年(一六六九)『山城国久世郡寺田村領内絵図』をみても、街道東側に二軒の茶屋が並んでいる。その南、水度神社参道と街道が交わる所に、「夜叉観音」と記され、東側にはため池(玉池)や墓が河原に続く。

夜叉塚について、『観音町沿革誌』には、「古へ寺田村に寺田の庄司と云ふ人あり。此人之娘、度々嫁入りをなせども不縁になり帰りしを以て、自然人呼んで夜叉と云ふ様ニなり、後年ハ此観音之御守をなし、終に此所にて死去せり。塚の前を婚礼が通過すれば夜叉が不縁にすると云ひ、一度も通らず」とある。伝承では、娘は池に身を投げたともいう(大畑忠、一九九三年)。この街道の夜叉塚は、前述の『大乘院寺社雑事記』文明十七年(一四八五)にも出ており、中世の奈良街道と近世の大和街道の伝承がこの辺りで

久世の街道の並びには、ゴンセという博打うちが住んでいた場所もあった。博打場は、久世茶屋と寺田茶屋の境界の街道東側の街道裏の二カ所、ちょうど、『寺田村領内絵図』で、茶屋が二軒描かれた場所にあった。久世と寺田の境界である。さらに、寺田茶屋と寺田の夜叉観音（現在の薬師堂か）との間の、学校前の商店の裏側、「ボテシン」なる馬力屋のあった所にも二、三カ所の博打場があったといわれる。

石屋や鍛冶屋は、年末に、近隣の人々に対して迷惑をかけたと漬物石や包丁を配った。鍛冶屋は、近世

称されていた。しばらく南下するとゆっくりとした下り坂になる。その下り坂のはじまり、天頂部に、「天下はん」と称された豆腐屋があった。ここには元「波屋」という屋号の家があった。その南に「飴屋」「有岡」とつづいた。「有岡」は、元淀藩の武士で街道一の豪商といわれ、この坂を、有岡の坂とまでいった。砂糖・雑貨・菓子・縄ない機などを扱っていたが、昭和初年に退居した。つづいて、旅館・木樵・塗師屋（後の大亀茶屋に移転）・ラオ屋・川ジャコ屋（川魚屋）・綿屋・「カゴ屋」・綿細工・「カンコリヤ」（氷屋）・「石屋」・「米善」（米屋）・「ヌカ屋」・「桶屋」・「カサヤ」・金糸製造業・鍛冶屋・呉服屋・タバコ屋などが並んだ。

人家も大きく入れ代わっており、中世はしのぶくもないが、前近代を想起せしめる大正末の茶屋の町並みを、聞き取りによって北から記述してみよう。大亀茶屋から南下すると、平川と久世との集落の境界に、「しる屋」という木賃宿があった。「しる屋」は、巡礼などを泊めていた遍路宿で、「乞食宿」とも蔑

は重なっていた。

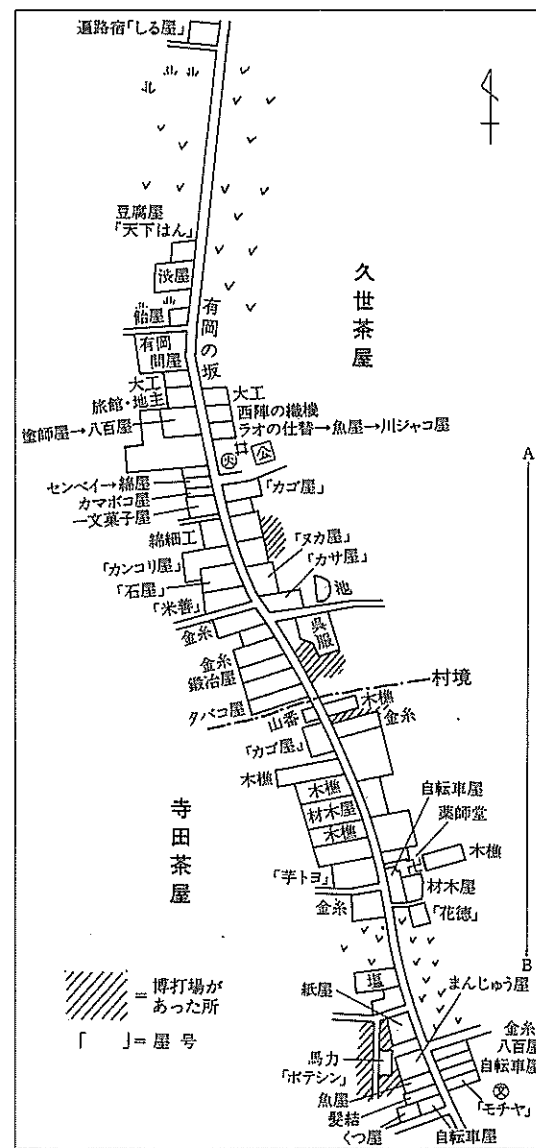


図4 久世茶屋と寺田茶屋

表1 大正～昭和初期における長池の商人、職人の内訳（確定できるもののみ）

商 人			職 人（生産販売も含む）	
旅 館	旅 館	1	住居関係	大 工 3
食品関係	豆 腐	2		瓦（奉公人含） 2
	茶	1		表 具 2
	菓子（駄菓子含む）	3		た た み 2
	煮 売	1	生活関係	くずやぶき 1
	料 理	5		桶 2
	鮮魚（奉公人含）	5		下 駄 3
	う ど ん	2		洋 服 1
	米	2		編 み 物 1
	寿 司	1		髪 結 1
	干物（行商）	1	そ の 他	金 糸 3
そ の 他	酒	3		製 茶 1
	粉	1		野 鍛 冶 1
	呉 服	3		カ ゴ 1
	竹	1		酒 造 1
	荒 物	3		車 曳 き 2
	薬	1		飛 脚 2
	新聞販売	1		印 刷 1
	花	1		製 缶 1
	荷物取扱	2		石 1
	蚊 帳	1		ミ シ ン 1

（川内秀文、1991年より）

に街道に定着した紀州鍛冶である。

信仰では、二月堂講や大師講のときに、任意でオンマカ風呂をすることがあった。久世・寺田で四〇人くらいが参加して、櫓を組んで風呂をわかして入った。久世茶屋でも三日ほどやったことがある。

街道は時代の変化をとらえるに敏であった。伏見の戦いで負けた武士のために、家の前に水を置いた家があったり、この武士に果物を与えたところ空中に果物を放り投げて刀の先に突き刺した話などが伝えられている。また、明治二十七年、宇治に陸軍の火薬庫ができたとき、そこに勤めに出入した人も、久世の茶屋だけで四名もいた。また、火薬庫が爆発したときに、多くの人が逃げて来る姿も語り伝えられている。街道の伝承は、時代を反映している。

長池の街並み

長池は、大和街道になってから整備された近世の宿場である。しかし、奈良など中世の宿の実態が明確ではない今日、宿場街の民俗は、中世の街道の風景を考える上で、無視できないものがある。また、森山地蔵・法然上人伝説など中世の奈良街道を偲ばす信仰も長池にはある。そこで長池の民俗についても報告したい。

寛文十一年（一六七二）『六カ村絵図』（市辺・中村自治会蔵）には、入口に松が一本あり、東側に、一八軒、西側に二二軒家並みがある。その南に、新町として、東側に一五軒、西側に一三軒が描かれている。

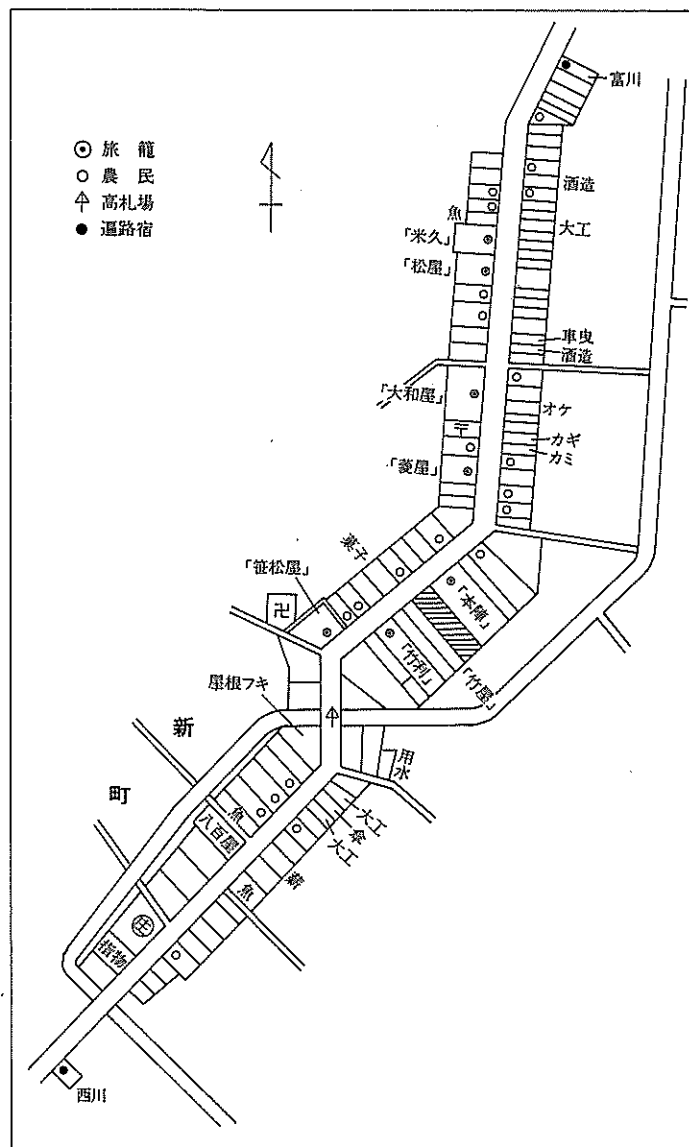


図5 近世長池宿の復元図（川内秀文一九九一年に書き加える）

もともと、富野集落の一部であって、富野の人々が堤防を築いて街道に街立てをしたといわれる。奈良街道の上狛・多賀には春日神人がいたが、富野にも春日神人がいた（『中臣祐賢記』文永二年（一二六五）四月二十三日条）。

聞書及び『長池人足帳』（文久三年（一八六三））などでわかった限りの大正から昭和の職人、商人は、表1のごとくである。

宿の西北入口には富川、東南出口から少し離れた所に西川なる木賃宿があった。これは通路宿で、屋号がない。内部は西北から、酒造・大工・魚屋とつづき、西側にのみ、「米久」・「松屋」・「大和屋」・「菱屋」と旅籠がつづく。東側には北から、「車屋」・「ネリサケ屋」（酒造）・「桶屋」・「鍵屋」・「紙屋」と職人名の屋号がつづく。そのあと、東側にも「本陣」・「宇右衛門」（問屋と旅籠？）・「竹屋」・「竹利」がつづく。西側には、菓子屋・草履屋と「笹松屋」なる旅籠がある。新町に入る橋の上に高札場があり、屋根葺屋・大工・「傘屋」・「阿波屋伊兵衛」（髪結）・大工・「薪屋」・魚屋・八百屋・魚屋・指物屋とつづく。

東側にあったという放示氏（ほうし）は、明治六年に郵便局を経営し、本陣だという説もあるが、わからない。「竹利」も「竹屋」の分家であるが、脇本陣であったとも伝えられる。「竹屋」「竹利」とも、七宝に花菱の紋で、諸国説法の法然上人からもらったものと伝えている。法然上人に由来して、長池の本陣は清水の姓で、脇が吉水の姓（「竹利」さんの姓）だという説もある。「竹利」は、冬の間竹屋をし、夏は茶問屋をしていた。それに旅籠を組み合わせ経営していたという。

他の旅籠のなかでも、「松屋」・「菱屋」は一級の旅籠であった。明治七年に、明治天皇が「菱屋」で休

憩したといい、葦屋は脇本陣という説もある。米久・大和屋は富山の葉売の定宿であった。もっとも、伏見の太田という葉屋の番頭は、田原に葉種を仕入れに行くときの定宿を葦屋にしていたという。長池以南の街道の宿や問屋が、田原の山産物を移出する田原道と関わっていることは注目される。

旅籠には、二月講、伊勢講（神楽講）・愛宕講など書いた木札をかけた。奈良の二月堂のお水取に使う竹が伏見の方から長池に持込まれたり、おかげまじりの震源が長池であったかのように伝えられているのは、街道、なかでも旅籠を通して、時代の変化が伝えられたからであろう。

長池の松屋は、近世の指定旅館制度の浪花講（文化元年（一八〇四）結成）に入っており、賭勝負や遊女買を禁止していた（宮垣克己、一九八五年、一五六～一五七頁）。禁止せねばならぬほど、近世末以前の街道では、賭博と売春が一般的であったということであろう。

さて、遊女買はともかく、近代にはいっても、長池では仲居が酌をし、三味線の音が響く料理屋が多くあったことはまちがいない。谷口屋・藤田屋・島芳・松阪屋・栄屋・魚覚・鳥井・鳥梅・魚松・鯉月などの料理屋があった。特別な設えはなく、裏の離れや、二階や下の居間などが、商売に利用された。

菓子屋では、荒物・たばこ・油なども売っていた。魚屋は、塩干物と川魚が主であった。

長池では「火事は七代たたる」といわれ、街道では警戒されたため、火事は少なかったという。しかし、元禄頃に丸焼けになっている。

長池の気風

長池の気風は開放的であり、移入者（養子）や、妾・後家・私生児を半人前として構成メンバーに入れないのではなく、一軒前として平等に扱った。反面、もめ事があると「カンドイテヤレ」ということで、警察に密告するような面も少なかったといわれる。

性に関しても極めて開放的であった。

先述のように、長池には一〇余の料理屋があったが、「料理屋の仲居さんとエーメ（良い思い）男女交際」した人も多い。夜になると飲みに行ったり、金がないと料理屋の仕事が終わる頃に遊びに行った。なかには、四国まで駆け落ちした人もいる。（他にも）相対する色話は（長池には多く）ある」という。とくに「八十八夜の頃には、（お茶の製造のために、付近の農家には）茶摘女が（住み込みで）出稼にきており、乾燥のための焙炉の炭火を調節する炉師もいた」ので、近在の外来者が、長池の料理屋を通して活発に男女交際した。近在の村の小作や若者は、農閑期には駅前の「マル通」の仲仕として働いていた。しかし、夜になって近所の料理屋から三味線の音や嬌声が聞こえると、仲仕はたまらなくなつて、隣の料理屋「島芳」に裏から入っていった。金のあるときは客としてだが、金のないときは遊びとしてでかけた。男が自転車で行って、男女交際することはよくあった。また、長池の娘を連れて踊りにいくこともあったし、多賀から若者が長池に踊りに来ることもあった。また、普段でも、寺田などの娘の家

に遊びにいった。男が遊びに来んような娘はアカンといわれた。そのまま結婚に至る場合と、そうでない場合とがあった。これは長池に限ったことではなく、農村でも同じであった。しかし、ヨバイの対象が、仲居や茶摘女になっており、金があれば買春的なものになり、金がなければヨバイになるのが、農村と違った街道の特色であった。

さらに、その結果としての私生児が多かったといわれるのも、長池の特色であった。農村では私生児や後家は肩身の狭い思いをするのが常であるが、長池の場合、それを一軒前として公認されていた。それを人々は、「長池は妾制度が発達」していたので、「後家ハンや二号ハンもインキヨ（分家）」として「一軒前」と公認したと伝承している。後家ハンは一軒前と張りだこで、昔の長池のヤモメには、馴染みが二三人いた。結婚式には馴染みの後家ハンに挨拶してから行った。こうした風習が、周辺農村とは異なり遅くまで伝承された。

さらに、長池には美人が多いといわれた。「A屋の三人娘」などと伝えられている。結婚してもすぐに帰ってきて、二号さんになって、インキヨ（分家）として長池に住みついた美人姉妹の話である。事実とはかく、このような話が伝わるような雰囲気は街道の町にはある。

このように、性について開放的であり、それを隠してしない長池でも、鉄道ができる、「トースト」汽車に乗って伏見の撞木町の遊廓に出かけて、半年ごとの掛け帳の長さを若者が競うようになった。七新（七条新町）や島原まで行ったことを自慢する者もいた。時代の変化のなかで、都会の買春の風も鉄道によって運ばれてきた。同様に、かつては都の風が街道によって運ばれてきたのであろう。

さらに、開放的な側面として、金銭に対する感覚が敏感であった。たとえば、長池には埋蔵金の噂話が伝わっている。だから昔から「屋敷は売っても蔵は手放すな」などといわれる。金が土蔵に埋まっていると噂され、その土蔵には盗人よけの神として「大岡越前」を祀るという習俗がある。

さらに開放的な別な面としては、農業における進取の気風がある。長池には三つの作物の移入伝承がある。一つは、伏見の桃山の桃を、桃山の百姓に拒否されても、長い竿で、柿採りのようにして失敬して、長池に芽接ぎをして植え、長池の名物にしたという話。もう一つは、伏見江戸町で作っていた茗荷を、長池の人が移入して植えたという話。さらにもう一つは、鬼界ヶ島に遠島になった島利兵衛が、享保元年（一七一六）ちゃんまげに芋の蔓を隠して持ち帰り、付近に広めたという話。今、北隣の村の地名を冠して、寺田芋として有名である。また、花菖蒲など花卉商品も、長池付近で最初に栽培された。

長池は周辺の農村を出た人々で構成されており、田畑を持つ者が極端に少なかった。小作仕事をする者が多かった。それだけに、さまざまな工夫をした農業をした。それでも小作の場合、宿場での仲仕事は本業とせねばならぬような貧しい百姓もいた。女も仲居・女中・茶摘などの仕事をした。

長池の信仰

長池の信仰は、日待講・愛宕講・地藏講が比較的厳格におこなわれていた。また、柳田観音を祀る柳田講や、東大寺二月堂を祀る二月講があった。

一例として、長池中ノ所（旧中町と本町が合併）の日待講を紹介する。トウヤ（頭屋）は事前に講員の家をまわって餅米を集め、餅をついておく。トウヤは三日前に各講員の家を訪れ、「ヒマチをたきますから来て下さい」と口頭で伝える。当日の夕方、半時間前に、トウヤの主人が和服を着て扇子を持ち、「用意ができましたからどうぞ」といって触れてまわる。トウヤの家の前に全員が集合して、荒見神社に集団で参詣し、トウヤに戻る。トウヤでは、床に「天照大神」の掛け軸をかけ、ヤカタ（祠）を祀っている。長老から順に一人ずつ、ヤカタにお光をあげて拜んで年齢順の席に座る。トウヤのあいさつの後、伊勢でいただいた徳利で、御神酒を大きなかわらけにそいで、順に飲む。その後、籤をコヨリで作って神前に置き、長老から順に拜んで籤を引いて、愛宕参りと伊勢参りの代参を決める。新年のあいさつ、決算のあと、宴会となる。宴会になって初めて、ヒの悪い人（前年に不幸のあった人）も参加する。十二時をまわる頃となると、謡が入り、最後に「ウーチマシヨ」ではじまる「大坂じめ」をして散会する。

また、各町内には地蔵が多く祀っている。個人で祀る地蔵を別にすると、各チウゴとの地蔵は、チウ井戸に併設して祀る。八月二十三日の地蔵盆の夜に、地蔵講で祀る。持地（所有地）から出た地蔵は、化粧して表に出して祀るが、チウウの地蔵は化粧をしない。

チウウ井戸のまわりの広場には、芝居小屋が置かれることもあった。菱屋に泊まって、そこを楽屋として侍の恰好をしたまま、チウウ井戸の興行にでかけた役者もいたという。三味線をひく女性をのせたタライを頭上に持ちあげる、といった程度の曲芸も興行された。農閑期に開催したので、農村部から見に来る人が多くいた。

チウウの地蔵以外に、西町地蔵講が管理する森山地蔵がある。昔、山中のサギサカ山に道があり（中世奈良街道か）、その道沿いの字森山を開拓しようとした人が、地蔵の祟りで震えがきて拓けなかった。それで、マチに下ろして祀ったのが森山地蔵で、寛永期の絵馬が存在している。その字森山には、土中からホウラクや瓦・杉丸などが出土するという。字森山あたりに居た人が下りて来たのが長池の始まりだという説もある。このあたりの話は、中世の奈良街道と近世宿場町とをつなぐ伝承ではなからうか。

しかし、長池は、一般には富野からの出稼者によって成立したといわれる。中世の春日神社の神人は、上狛・多賀など、奈良街道沿いにいるが、『中臣祐賢記』十四の、文永二年（一二六五）四月二十三日条には、「富野郷白人神人」とあり、長池の本村である富野にも、中世の神人がいることが注目される。

また、長池には狸がいるという場所が数カ所ある。大和屋・菱屋・散髪屋の裏におり、揚げ豆腐をやる人もいた。大和屋や菱屋では狸の腹鼓が聞こえるという。街道のマチで聞かれるのは狐の伝承ではなく、狸の伝承である。商家の前の狸の置物ように、狸と街道・商業とは何か関わりがあるのであろうか。

観音堂

長池から観音堂の集落へ入る入口に、二本松という所があり、実際に二本の松があった。京都と奈良の真ん中といわれ、京都から来た旅人と奈良から来た旅人が一本ずつ松を植えたので二本松になったといわれる。その二本松に、宇治川合戦に破れた高倉宮（もとくらみや）王が、冑（かぶと）を掛けてそのままにして南に落ちのびた。

その胃を祀った神社が胃大明神、または甲神社だという。今の旦あさくら神神社である。二本松は、ジェーン台風のおりに倒れたが、中から蛇が出てきたので、跡地に祠を設けて祀っている。

その甲神社の神宮寺が、真言宗しんごん推尾山光明寺である。平安後期の十一面観音を祀っている。もとは、青島村の山中の推尾山にあった観音寺の本尊であった。『青谷小学校百年誌』(二三四―二三五頁)によれば、「山城国綴喜郡推尾山観音寺縁起」(年代不詳)に、つぎのような伝承が記してある。

行基が一七日間、唐櫃谷において参籠したとき、地主神粟大神(式内)があらわれ、椎の大樹で仏を彫ることをすすめる。それで大和国の長谷寺観音を模形した観音を彫ったので、新長谷寺ともよんだ。これが粟大明神の御本地仏である。応仁の兵火にかかって廃滅の折、この像を他所に移そうとしたが動かず、ただ、後口寺某なる者のみが動かすことができ、よって彼がこの観音像を背負って観音堂村に安置したという。

さらに、「光明寺寄付帳 序」(年代不詳)によれば、後醍醐天皇の靈夢に、強敵追討はこの観音の靈験とあり、楠木正成が七堂伽藍を建立したとも伝えられている。

粟神社が鎮座する所は青谷村である。粟はアオと読むのではないか。とするとこれらの伝承は「アオ」と「光明寺」の組み合わせである。粟生と光明については、長岡京市に浄土宗の靈地、粟生山あお光明寺がある。観音堂村に粟生氏あおがいる。粟と粟の漢字の異動を予想しているが、粟生氏と後口寺氏との関係はわからない。青谷山中の式内粟神社との関わりを持つ観音信仰が、なぜ高倉宮以仁王の胃や南朝の伝承をひきずりながら、中世末に、街道に沿ったこの観音堂村に出てきたのであろうか。古代のモチーフをもった中

世の山民文化が街道に出た伝承と考える。甲という鉄と、長谷寺の観音信仰との結びつきは、柳田国男の指摘する炭焼小五郎の鍛冶・鋳物師伝承を想わすものがある。観音堂はこのように、山人的文化の根を持っている。さらに、観音堂には、生菓の仲買人が数軒あったという。菓の売買は、かつては山岳信仰の徒の手によっていた。ここにも、観音堂の山人的文化をみることができる。

奈良十六

寛文十一年(一六七二)『六カ村絵図』によれば、大和街道に、「奈島村新町」として、街道の西側にのみ七軒の家が間隔を置いて配置されているのがみえる。今の城陽市奈良の十六地区にあたるのであろう。さらに、木津川の浜には二軒の家が描かれている。十六浜とよばれる地域であろう。『青谷小学校百年誌』(二三五―二四二頁)によれば、十六は松本神社の老松のそばにある丈六堂に由来した地名だという。穢氣を嫌わず、上下を選ばず、諸人の寄宿した所であるといわれる。松本神社周辺からは平安時代の土師器が出ていたという(大畑忠、一九八四年)。

しかし、松本神社は、もとは木津川の畔(十六浜)にあって、渡し守の神であった。すなわち、古代より、浜の集落とは別に、街道にも「新町」があったのかもしれない。松本神社は、貞応年中(一二二二―一二二四)、解脱上人の建立であって、賀茂大明神の本地仏十一面観音を勧請し大両権現と称した。ちなみに、奈島村の賀茂神社も、寛治六年(一〇九二)京の賀茂より勧請した。

興味深い。

十六は農業ではなく、様々な商工が展開した所である。昭和初期でも、木炭屋・饅頭屋・こんにゃく屋・養蚕の道具屋・棒屋（堅木屋）・お茶屋（製茶業）二軒・お茶の卸屋・桑の苗と繭の扱い所・人力車屋・樽職人・茶店などがあった。茶店は、青谷川の土手を登った所の天狗の松の下にあった。木炭・茶・

『百練抄』によれば、永万元年（一一六五）には、春日の神木と神興が木津川を渡ってきたとき丈六堂のあたりに宿したという。鎌倉期の『宇治拾遺物語』でも、「永超僧都（一〇九五年没 魚食う事」に、丈六堂に休憩した僧都に魚を献上した家が、疫病神を避けることができた話がある。丈六堂は、穢を厭わぬ特別な空間だったのである。穢をいとわぬ丈六の宿の論理に従えば、街道を伝ってやってくる疫病神をも防ぐことができるというのが、この話の意図である。

では、大正頃の十六はどうであろうか。奈良村の枝村としての十六は、北・中・南・街道・浜の四地区にわかれていた。浜地区は、青谷川と木津川の合流口の十六浜まで延びているが、ここには現在誰も住んでいない。しかし、大正頃は帆掛け舟の浜（着船場）があり、権四郎（奈良住人）の蔵が数棟あり、着船の目印の大榎があったという。

ところで、十六の集落は、南北に走る街道に沿って展開しているが、正確に言うと、この西側が奈良領であり、東側が市辺領である。しかも、東側の屋敷地の、街道から一間幅だけ奈良領である。つまり、街道そのものは奈良領であり、街道から一間入った所で屋敷地を分断する形で、市辺領との境界がひかれている。先に紹介した『六カ村絵図』において、奈良新町が街道の西側のみに展開したことと考えあわせて

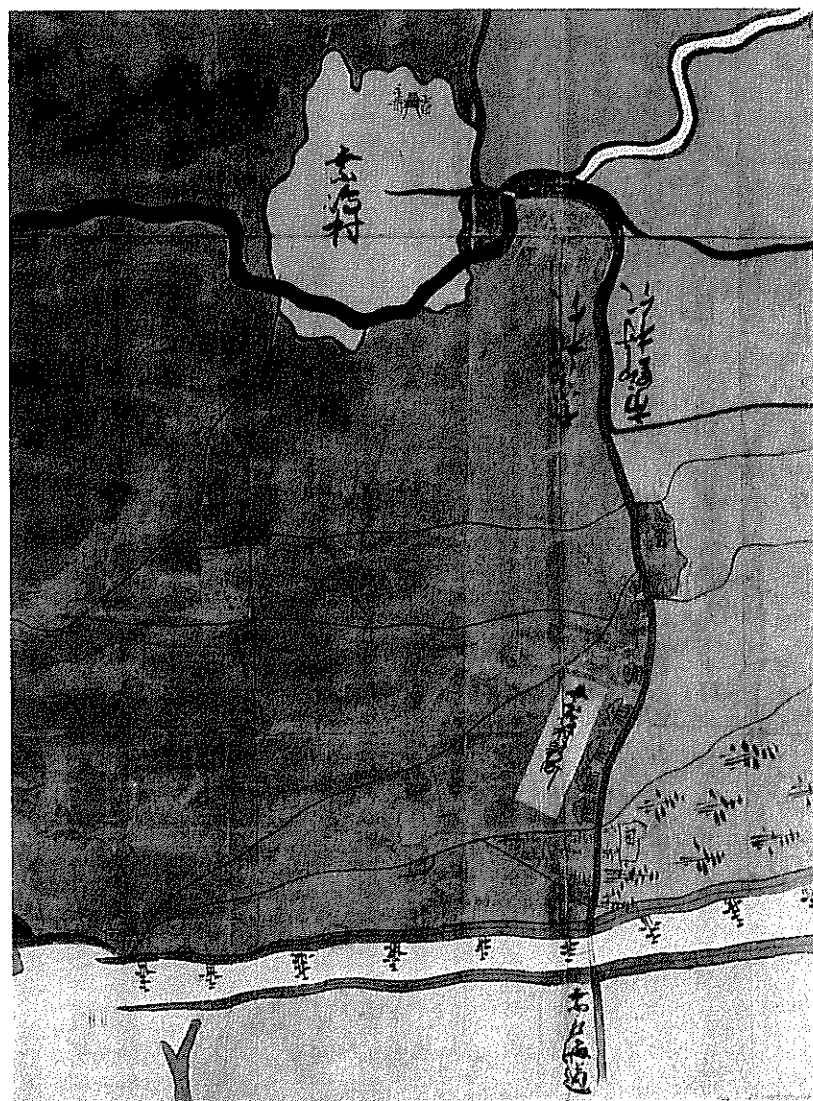


図6 寛文十一年『六カ村絵図』部分（市辺自治会蔵、城陽市教育委員会提供）

こんにやく・養蚕など、宇治田原の製品を加工販売する谷口町としての産業が多かった。これは十六が田原道の谷口、木津川船運の結接点であったことによると思われる。

十六には、特定の六軒のみが参加する金平講がある。一月十日など、年四回、金比羅大権現の掛け軸をかけて拝んだ。かつての船運に関係した問屋の人々の行事かもしれない。農村にはない講である。他には、東大寺二月堂のお水取りのお松明に代表二人を代参させる二月講、庚申講・愛宕講・伊勢講・天神講などがある。

十六は、農地を多く持たないので、農村の子供との喧嘩のとき、「十六よいとこセンチ(糞) マチ、ハシで家たてて、ピチクソで壁塗って、雨が降ったらドボドボや」などと、戯れ歌でからかわれた。先に紹介した、大亀茶屋に対する悪口の歌と同様である。このような感覚で農民は街道の民をみていた。しかし、十六は大雨が来たら浸水する「ドボドボ」の河原と歌われるものの、事実は青谷川の自然堤防上にあり、大正六年の浸水でも、ドボドボだったのは奈島本村の方であった。

野 市

奈島・市辺(城陽市)と多賀(玉水町)の境界を流れる青谷川は、かつては現在の二倍程のただっ広い、普段は水のない河原であった。橋は架かっていなくて、飛び石が二カ所あった。多賀集落の子供は、「演習しよか」と言って、市辺などと喧嘩を買いに河原に出た。

青谷川の市辺側の土手には、河原を背にして梅ヶ枝座があった。季節的に、年に何回か旅役者が「金色夜叉」などの芝居を演じた。芝居小屋には部屋があり、役者が寝泊まりしていた。市辺村の管理で、昭和三十四年頃まではあった。なかには「乞食芝居」とさげすみ、これを見ることを戒める風もあったが、これを楽しみにする人々も多かった。

また、堤防の上には、二軒の料理屋があった。南の多賀側、梅ヶ枝座の背向かいには「ツジイチ」があった。多賀の人の経営する、仲居を雇った一杯飲み屋である。八畳の部屋三つと裏にも部屋がある規模であった。さらに梅ヶ枝座の上手の隣に、市辺の人の経営する料理屋「カワマツ」があった。

梅ヶ枝座は堤防上の道路に面し、河原を背にして建っていた。その裏手の河原には、十月十五日の高神社(多賀)の祭礼のための物品を買い入れる野市が十二日に開かれた。鯖屋・玩具屋・のぞきからくりなどが店を連ねた。カーバイトの明かりをつけていた。この市は多賀の人が「世話やき」をしていた。

大正十五年頃、下流の多賀地区に、青谷地区(城陽市側)・井手及び、田原越でやってくる宇治田原の人々の購買をねらって一〇〜一二軒の市場ができたため、野市はふるわなくなった。

多 賀

多賀は扇状地の上にあり、農地としてはよくなかった。「嫁にやるなら多賀へはやるな。多賀は石どこ、けつまずく」などと悪口をいわれた。にもかかわらず、「寺田千軒、多賀千軒」といわれるほど、多くの

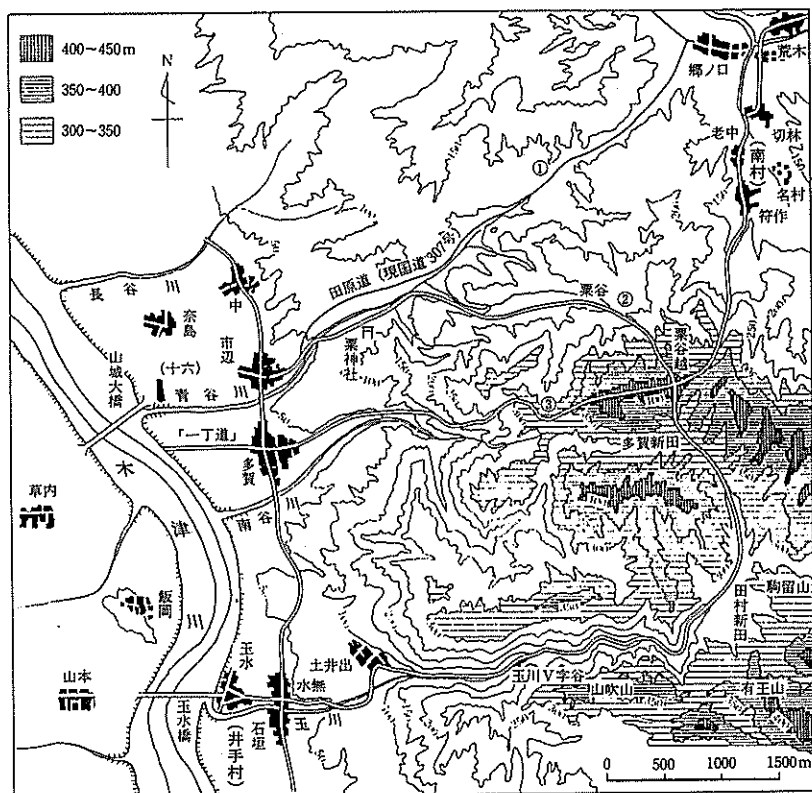


図7 田原道の3つのルート（乾幸次、1987年、82頁に加筆）

人口があつた。

青谷川をはさんで、十六の南対岸には多賀茶屋集落があった。この茶屋は、十六に浜があったように、木津川に上の浜・下の浜という二つの浜を持っており、江戸時代には荷物の取扱いに對して、浜口銭がとられた（井手町史編輯委員会、一九七九年、一九六—一九七頁）。ここに、谷岡八郎右衛門という問屋があった。祖先は一条天皇のときの北面の武士で、後裔は大坂で虎屋という商店をしていたが、多賀に落ちついたという伝承を持つ。

谷岡は、多賀や宇治田原産出の米・茶を扱い、製茶及び卸・運送をしていた加工問屋であつて、木津川船運を使つていた。また金貨業もしていた。しかし明治初年に貸金が戻らなかつたため、退居して多賀集落へ移つてきて、酒・荒物から米まで扱う村の店となつた。一時は青谷の梅見の観光客のための缶詰や酒を売る店を進出させたり、先述の大正十五年頃にできた市場にも出店した。

農地としてはあまり条件のよくない多賀が、多賀千軒と謳われたのには、ここが田原道の分岐であつたことによる。地元では、多賀茶屋のある近世の大和街道をカイドウと呼び、多賀集落を貫く道をホンドウとよぶ。そして、ここから山沿いを分岐して田原越えを行く山越え道を信楽街道しがらぎとよんでいる。

田原越えについては、『多賀村山論図』（天保十一年（一八四〇）、市辺・中村・多賀自治会所有）をみると、

- ①市辺から青谷川を遡って郷ノ口をへて田原に至る道（現在の国道三〇七号線）
②市辺から式内粟神社の前を通って粟谷越えを登って田原に至る道

③多賀から山道を一気に登って奥山新田・栗谷越えから田原に至る道の三つがある。

①は、同絵図には幅広い河原に砂が堆積しているように描かれている。幕末に何度も崩れ、三村一致で改修しながら使ってきた道であった。改修されて、やっと使える困難な道であった。明治に入って荷車を使うようになり、緩い勾配が必要になったから、三村が谷あいの道を改修したのではないかと思われるので新しい。

これに対して、②に田原道の注記があると乾幸次は指摘しているが、一方で③が多賀や十六の浜、すなわち木津川船運と直結するルートであり、宇治盆地の茶・木炭の移出に重要な意味を持ったことを指摘している（乾幸次、一九八七年、七八～八五頁）。

おそらく、古代は②のルートを取り、市辺に「野市」のような市が生まれる可能性はあるし、さらに西に出た十六に、奈良街道・木津川船運送との結節点を求めることも可能であろう。しかし、荷物を背にして山の尾根を通る近代の輸送を考えると、山越えで多賀に直接下りる③のルートによる輸送が最も自然なものであったろう。多賀には西の浜から、大和街道・奈良街道を横切り、そのまま東の山中に入る、一丁道がある。この一丁道は札場ノ辻を通り、山中に入っている。最もよく使われたものと思う（乾幸次、一九八七年、七八～八五頁）。

だとするならば、多賀は中世奈良街道と、田原との結節点であり、春日神人がいたこととも考えあわせると興味深い。実際、多賀には「北古市場」「南古市場」の字名があり、この市を通して多賀郷の住民は、

すでに鎌倉時代に末端の里人に至るまで、高神社の改築の奉加を、米よりもむしろ錢貨とするほうが好都合というまでに、成長していたといわれる（井手町史編纂委員会、一九八二年、二三三～三四頁）。

おわりに

従来、民俗学は、伝承から近世農民の生活、常民の世界をえがこうとしてきた。しかし、都市や木地師・鉾山の民俗、すなわち非常民の世界を検討していくと、中世の人々の活動を検討する手掛かりになるかもしれない。現今の伝承世界から中世の風景を見ようとする無謀な試みも、日本の都市民俗の根幹を問うという意味を持つものと思う。

ここでは、街道に展開する、信仰、女性、博打、交易、加工業の伝承を、古代から近代まで乱雑に記述した。しかし、街道に生きる人々の風景を感じとることは、中世という時代を想像するには最も重要なことの一つではなからうか。時代をこえたマチの発芽をここにみるのであり、マチの最初の発生こそ中世であり、マチの自由こそ、中世を特色づけるものではなかったか。

なお、本論作成については、大畑忠城陽市史編纂室長に大変お世話になった。

参考文献

青谷小学校『青谷小学校百年誌』一九九〇年



中世の風景を読む 第五卷
信仰と自由に生きる

1995年10月5日 初版第一刷発行

編者 網野善彦
石井進
装丁 山崎登
発行者 菅英志
発行所 株式会社新人物往来社
東京都千代田区丸の内3-3-1 新東京ビル
電話 営業 03(3212)3931 振替 00160-5-151643 -
電話 編集 03(3212)3936
印刷所 精興社
製本所 小泉製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
(定価はカバー・帯に表示してあります) Printed in Japan
ISBN 4-404-02177-1 C0021

井手町史編纂委員会『井手町の古代・中世・近世』一九八二年
井手町史編纂委員会『井手町史シリーズ 三 くらしの歴史』一九七九年
乾幸次『南山城の歴史的景観』古今書院、一九八七年
大畑忠『十六で魚を食べた話』『広報じょうよう』所収「市史の散歩道」一九八四年
大畑忠『村境にあった坂の上の茶屋』『広報じょうよう』所収「市史の散歩道」一一五、一九九二年
大畑忠『夜叉ばあさんの伝説』『広報じょうよう』所収「市史の散歩道」一二三、一九九三年
大森正雄『長池町の今昔』一九七一年、自家版
川内秀文『近世脇街道の宿場町く大和街道山城国長池宿を中心として』仏教大学一九九一年度卒業論文
林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史』第六巻、一九八一年
宮垣克己『史料が語る城陽の近世史』第二集、城陽市教育委員会、一九八五年
森栗茂一『河原町の民俗地理論』弘文堂、一九九〇年
森栗茂一『都市』の発見・『民俗学』の発見『京都民俗』第一〇巻、一九九三年